

同志社の逸品

— collection 1 —

井深八重自筆の聖句



この聖句「汝若き日に創造主を覚えよ」（旧約聖書伝道の書12章1節）は、同志社女子大学京田辺キャンパス恵真館（体育館）の正面玄関に掲げられている。田辺開校（1906年）に際して、当時、一般教育の体育を担当し、同志社の歴史にもあかるい秦芳江名誉教授が敬愛する先輩である井深八重に聖句の揮毫を依頼したものである。この聖句は、秦氏が同志社女子専門学校に入学した折に出会い、胸に迫るものを感じた言葉であった。

井深八重（1897—1989）は、1918年に同志社女学校専門学部英文科を卒業すると同時に長崎県立長崎高等女学校に英語教師として着任した。翌1919年、ハンセン病と疑われ、神山復生病院に隔離入院することとなる。22歳の夏の出来事であった。1922年に誤診であることが判明するが、彼女は、病院に留まり、社会から見放されたハンセン病患者の看護と救済のためにその生涯を捧げる道を選んだのである。

井深は、母校の学報『しばぐさ』が「女性と社会」と題する特集を組んだ際に「想い出を巡りて」と題する文章を寄稿しており、往時を次のように語っている。

当時の病院として最も必要とするものは常住の専属医師と看護婦でありました。医師となるには少なくとも五、六年はかかる時代でしたので、私は看護婦の道を選び、資格をとって改めて看護婦として仕えることになりました。昭和十五年三月三十一日に現職を退くまでこの道ひとすじに生きて参りましたが、いつしか六十有余年の

歳月を重ねて今日を迎えることになりました。種々の訓練にもまれながらも、ここに主のみ旨を見出し、素直に耐えてこられましたのも、同志社に学び得てキリストを知り祈ることを教えて頂いた賜と感謝のほかございません。（『しばぐさ』第21号、1982年）

一方、秦芳江氏には「あの人・この人 井深八重さんのこと」という文章がある。

このあこがれの君に初めておめにかかったのは、同志社が名誉博士号を差し上げた際の、同窓会の歓迎会の席上であった。そして井深さんがまた、私と同じ位の花とネコの愛好者であることを発見した。春休みの度にお訪ねした病院の花ざかりの木蓮や連翹の下で、また達筆のお便りには、かならず、毎朝のミサでは母校同志社と教職員学生ひとりひとりの為に祈っておられること—今私にできるのは祈ることだけです—というお言葉があった。（『同志社時報』第89号、1990年）

恵真館の正面玄関に掲げられたこの聖句は、マザー・テレサに続く「日本の天使」（『TIME』誌、1975年12月29日号）である井深八重と、新島襄を「真正にして最大のフェミニスト」と敬いつつ同志社体育の歴史を探究した秦芳江という二人の卒業生からの若き後輩たちへの熱きメッセージなのである。

（女子大学教授 大島中正）